〈研究ノート〉

介護福祉士養成施設における学生の介護福祉実習での学び
── ポートフォリオを実践して ──

平　澤　泰　子

要約

介護福祉士養成施設における介護福祉実習は、学生が介護福祉士となるために、学内で学んだ専門的知識や技術を実際の介護の現場で体験し統合していく大変重要な学びの場である。学生は実習を通して成長すると言われている。介護技術を身につけるとともに「人の尊厳を守ることの意味」や「介護観」を形成していく。本研究は、学生が自己の成長に気づいているか、また気づきはどのようなものであったか、気づくことが学生にどのような効果をもたらしたかを調査した。学生の多くは自己の成長に気づかずにいた。ポートフォリオを活用して振り返りを行った結果、自己の成長過程に気づき、次への成長に繋げることができた。自己の考えや行動の変化に気づき成長を認識することは、次の目標に繋がる大変重要なことであることが示唆された。

キーワード　介護福祉実習、人としての成長、気づき、ポートフォリオ

目次

１．はじめに
２．研究の目的
３．研究の背景と現状
４．研究の方法
５．倫理的配慮
６．人としての成長
７．聞き取り調査
８．結果
９．考察
10．今後の課題
11．おわりに

１．はじめに

介護福祉士養成施設（以下　養成校という）における介護福祉実習（以下　実習という）は、学生が介護福祉士となるために、学内で学んだ専門的知識や技術を、実際の介護の現場で体験し統合していく大変重要な学びの場である。学生は実習を通して、「利用者の生活を

支援するためのさまざまな技術」を体感し身につけていく。また、「人の尊厳を守ることの意味」や「介護観」を形成していく。そして、実習を終了する時に、教員は学生の人としての成長を見ることができる。

学生が人としてどのように成長するのか、その成長とは何を指すのかは、曖昧で明確ではない。また学生自身もその成長に気づいていないことが多いと考えられる。その成長とは何かを明らかにし、学生自身がそれを認識することは大変重要なことと考える。そしてそれは、学生が更に成長するための基盤を作ることになると考える。

このことはさらに、養成校は、厚生労働省が示す「社会福祉士および介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」における「資格取得後の現任研修等による継続的な教育を視野に入れた内容を組み入れる」ことへの手がかりを見出すことができるといえよう。

2．研究の目的

本研究の目的は、実習を通して学生が人として成長するといわれるが、その成長とは何かを明らかにすることである。学生がその成長に気づいているかを把握し、「人としての成長」の気づきはどのようなものであるかを知ることである。

学生は、人として成長したことを認識し、その要因を明らかにすることによって、次へのステップとしての目標を明確にすることができる。更に、介護現場で働く際の、介護職としての指針を見つけることに繋がる。

3．研究の背景と現状

介護福祉士の資格を取得するための必須科目「介護実習」450時間を、本学では2年間の学びの中で、4つの時期に分けて実施している。

	段　階	実施年次	日数	内　　容
1	第1段階	1	12	施設介護
2	第2段階	2	23	施設介護
3	第3段階	2	6	訪問介護・デイサービス・グループホームなど
4	第4段階	2	17	施設介護

第1段階実習は、1年次に12日間の実習を施設において体験する。第2段階実習は、2年次に23日間の実習を施設において介護技術やケアプラン作成などを実際に行う。第3段階実習は、2年次の6日間を訪問介護事業所・デイサービスセンター・グループホームなどで、それぞれ2日間の実習を体験する。第4段階実習は、2年次に17日間の実習を施設において実際に行う。

学生は、基本的に体験学習から実践学習へと段階を踏みながら、利用者を理解し支援する方法を学んでいく。利用者のさまざまな生活の場面を通して、多くの情報を得ながら、課題分析・ニーズの把握・実施等、介護過程を展開していく。

学生にとっては、一つひとつの実習が学びの場であるが、それとともに社会人としての行動が求められる試練の場でもある。社会に出ることが初めての学生も多いため、学生が抱く

プレッシャーや緊張感は量りしれないものがある。そのような状況の中で学生はさまざまな場面に遭遇する。

４．研究の方法

本年、筆者が直接実習指導を行った学生、2年生10名に対し、学生1人に対して1 ～ 1.5時間の聞き取り調査を実施した。学生がそれぞれの段階の実習を内省（reflection）し、その変化を見出すことができるよう、ポートフォリオを活用した。

５．倫理的配慮

学生に対して、本研究の趣旨および方法を文書で説明した。実習の振り返りを行うこと、その振り返りは、教員が学生の実習を評価することではなく、学生自身が自己の振り返りを行うことであることを説明した。本研究の協力を拒否しても、何ら学生に不利益は生じないこと、聞き取り調査の途中でも止めることができること、協力してもらえる場合、プライバシーを固く守ることを説明した。研究結果については、聞き取った内容の文章化したものを各学生に間違いが無いことを確認してもらった後に、学内教員の実習指導に役立てるための資料に使用すること、学内で研究レポートとして報告すること、学会等で発表することを伝えた。発表の際には個人名が特定されないことを説明した。以上の内容に対して、本人の同意を文書で得て実施した。

６．人としての成長

「成長」とは、「人が育って大きくなること・大人になること」と定義されている（大辞林）。しかし、「人としての成長」を具体的に示し定義することは大変難しい。

平木（1993）は、「エリクソンの発達段階の青年期（12 ～ 22歳）は、子どもから大人になる準備期間であり、大人としての職業的、精神的、性的自立を確立するために、それまでに積み残してきた課題や不十分にしか達成されていない課題をある程度精算するためにも、猶予期間が必要である。つまり、青年は猶予期間を使って、アイデンティティの確立にコミットするのである。」と言っている。

また、苫米地（2010）は、「大学以前から心理的な問題を抱えていても、受験という大きな目標があることで、それを見ないようにしてきている。大学に入学して自由な時間ができることで問題が表面化すると言える。見方を変えると、学生になって初めて自分の問題と取り組むことができるようになったと考えることもできる。」と言っている。

そして、「人としての成長」については、岡田（綾）（2009）は、「成長のチャンスは、人と人との交流の場にある。私たちが働く職場は、個人が生涯にわたって成長し続けるための重要な舞台となる」また、「気づきを自分のテーマにつなげ、深めていく過程そのものが、その人の成長であることは間違いない」と言っている。

また、野中（2010）は、「人や組織がイノベーションを起こす時、必ず個人の‘気づき’

があり、それは「共同化」の中で起こる」「イノベーションは科学的な分析からは決して生まれない」「現場に直接触れ、個別具体的な一回性の中から気づいて普遍性を読み取る」「共振・共感・共鳴して気づきを得る」「気づく習慣を身につける」ことが重要であることを指摘している。

これらの先行研究から、学生たちは、高校を卒業し、大学生活をスタートしたこの時期は人生の道のりといった視点からも「大人になる大事な時期」を迎えている。そしてその大事な時期に、実習は、学生たちに人と人との交流の場を与え、学生たちがそれまでの自分に気づき、自分の言動の変化に気づくことができる成長のチャンスの場を与えている。実習は学生たちの人としての成長過程に大きな役割を果たしていると言える。

実習における「人としての成長」は、介護職としての人としての成長であり、受容力、共感力、忍耐力、想像力などさまざまな力量が必要とされる。そのため、これらの力量に気づくことも大きな成長と考える。学生たちはそれらの課題の中で、自分自身の現状に「気づく」ことなく成長することはあり得ない。

そこで、「人としての成長」を「気づくこと」とした。そしてその「気づくこと」を、「気づくことが自分自身の感受性を高めた」「気づくことが自分自身の介護職としてのアイデンティティを確立した」「気づくことが他の成長を可能する基盤を作った」と三つの質的差異に分けて検証することにした。また、介護福祉士として求められる「受容力」「共感力」「傾聴力」「忍耐力」「想像力」などさまざまな力量があるが、学生が人と人との交流の中で、どのような点に気づき、その改善が見られたかについても検証することとした。

7．聞き取り調査

今回の聞き取りは、「ポートフォリオ」を活用して実施した。ポートフォリオとは、「紙ばさみ」あるいは「書類入れ」を意味する英語が語源である。つまり、「ファイル」のようなものである。しかしながら、単なる保管するための「ファイル」ではなく、「入れ替え自由な「紙ばさみ」であり、「紙ばさみ」から出したり入れたりしたバラバラな情報を一つに纏め、一元化することである。

このような方法は、総合的な学習評価法として、ロンドン大学のS.Clerk教授を中心に考案されたものである。1980年代後半にイギリスやアメリカで取り入れられ、日本には1990年代に導入された。従来の科目テストや知力テストといった数値で測定できない能力の質的評価方法として注目されてきている。

わが国は、各教科の観点別学習状況欄の4観点である「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」に関して、1980年には最後に位置していた「関心・意欲・態度」が1991年の「指導要録改訂の概要」で最初の位置に変更された。つまり、「知識・理解」が大切であることは無論のことであるが、「関心・意欲・態度」の育成が優位であることが示された。そのことによって、「自ら学ぶ意欲・思考力・判断力などの育成に重点をおくことが明確になるよう配慮した」ことが表されたのである。

ポートフォリオは、これまで「医学生」「看護学生」「教育学生」に対して実施されてきたが、介護福祉の分野での活用はあまり見あたらない。綿ら（2008）が、「介護福祉教育の国際生活機能分類（ICF）に基づいたアセスメントシートの開発とポートフォリオ評価の施行」の中で、「ポートフォリオ評価の施行」を行っている。「毎日のあしあと」「振り返りシート」「成長の記録」を記すことによって「ポートフォリオ」を実施したが、「学生の負担を考えて自由に記述することとしたため、実習記録にはあらわれてこない学生の消化することのできない介護に対する想いを拾いあげることができた」との報告にとどめている。また、「ポートフォリオ評価の意義や今後の課題がつかめた」ことを報告している。

８．結果

10名の学生に依頼し、10名全員から同意を得られたため、10名を本研究の対象とした。本研究は聞き取り調査で実施したものであるが、理解し易いように「常体」に統一して記載した。なお、学生の発言内容に関しては、その時の学生の思いを再現するために、極力手を加えずに記載した。

①学生Ａ

第1段階実習では、いちばん初めにさせてもらった「食事介助」は難しかった。どうして良いのか分からなかった。「排泄介助」では引いてしまい、「やりません、今度します」と言ってしまった。「入浴介助」「着脱介助」「トランス」すべてができなかった。「記録」も日記のようだと言われた。今でも読み返すのが嫌だ。「コミュニケーション」は、実習が終了する頃にはよく話す人ができたが、あまり話さなかった。施設が広くて静かでコミュニケーションを取る感じではなかった。

第2段階実習では、第1段階実習で積極的に動けなかったので、積極的に行動しようと思った。第1段階実習ですべての介護技術をさせてもらったお陰で、いろいろとできた。実習指導者も、失敗しても良いからやってごらんと言ってくれたので安心してできた。「記録」も書けたと思う。実習指導者や本学の先生にも教えてもらった。

「コミュニケーション」は、利用者も職員も仲がよく楽しい雰囲気があった。居室の近くにフリースペースがあって、利用者が出てきて集っていた。コミュニケーションを取りやすい環境があった。施設の雰囲気がコミュニケーションを取り易かったんだと思う。

「ケアプラン」を作成させてもらう対象者もすぐに決まった。対象者は「異食」があった。実習中、自分が接しているときには異食はなかったが、食事の時間になると「不穏」になった。ケアプランは、「不穏にならないようにする」とした。食事の時間になる頃、私は「食事を作っているところを見に行きましょうか」と言って誘い、10分くらい散歩をするようにした。そのせいか、不穏にならずに食事をすることができた。食事の時間でなくても「不穏」のときもあった。そのときには少し距離をおき、しばらくしてから声をかけた。

「入浴介助」で、暴れたり、引っかいたり、噛みつく利用者がいた。職員は大変な思い

をしてベルトをつけたり入浴の介助をしたりしていた。その利用者の入浴介助を自分がすることとなった。「危ないのでベルトしますねー」といってベルトをした。何も言わず絞めさせてくれた。

実習中に叩かれることもあった。その時はショックだったけど、その利用者のことが好きだったからどうとも思わなかった。実習が終了する間際、ある利用者が病院の受診から車椅子で帰ってきた。それから車椅子の生活となり元気がなかった。今でもどうしてそうなったのかと気になる。

第1段階実習では何もできなかったが、第2段階実習では、「利用者の気持ちに沿うこと」ができていた。そして実習が終了する頃には、「気になる」「元気のない」利用者に対して、「どうしてそうなってしまったのか」と心配する気持ちがでてきた。今でも心配している。

第2段階実習は、第1段階実習の経験を活かして積極的に活動することができた。第1段階実習を振り返ると、介護技術ができたかあるいはできなかったかということばかりであったが、第2段階実習を振り返ると、利用者の状況や変化を把握しようとする姿勢がうまれていたことに気づいた。次の実習では、今の気持ちを忘れないように、目に見えにくい利用者の状況や態度から、利用者の訴えてくるものは何かを受け止めることも考えて実習をしようという目標を見出すことができた。

介護は介護技術だけではなく、利用者の状況や態度から、利用者の訴えてくるものが何かを受け止めることも大切なことであることに気づいた。指導者の中で、「こんな介護福祉士になりたい」と思える人に出会った。その職員は、利用者の言葉を無視することなく、しっかり受け止めようとしていた。そんな姿に感動した。大事なことに気づいた。

②学生Ｂ

第1段階実習はつまらなかった。寝たきりの利用者ばかりで、コミュニケーションを取れる人がいなかった。全くいないわけではなかったが、どのように取ればよいのかもわからなかった。その人に声をかけてみようかとも思ったが、その利用者は体力がなく、すぐに疲れてしまうのではないかと思った。

毎日、同じ作業を行った。口腔ケアが済むと、コップ洗いをした。その後おむつ交換をした。昼食・休憩をした後、おむつ交換をしておやつ介助という流れだった。「食事介助」は、毎日同じ利用者だった。反応がなかった。指導者に別の人の食事介助をさせてもらいたいとお願いした。でも、別の利用者も同じような感じであった。「おむつ交換」は、はじめの2～3日は見学であったが、次からは実際に活動に入った。臭い・軟らかい・汚れの範囲が広いなど大変だった。第1段階実習はこのような状況であったので、つまらなかった。

今から考えると、学校ではできない利用者とコミュニケーションができるせっかくの場であったのに、利用者とのコミュニケーションがなかった。自分から「コミュニケーションを取りたい」といえば良かったと思う。

第2段階実習は楽しかった。多くの利用者とコミュニケーションができた。毎日が楽しく時間の流れが速く感じた。一緒に楽しめた。家にいたとしても、施設入所であったとしても、コミュニケーションが大切だと思った。

「排泄介助」はおむつ交換を行った。便は臭いがきつく、薬などで軟らかくなっていて、汚れの範囲も広く、量も多かった。はじめの2～3日は見学だったが、4日目からは実施した。何度か経験させてもらい少しできるようになった。

「コミュニケーション」では、利用者に「ここの生活はどのようなことが楽しいですか」と尋ねると、「実習生の人たちと話をするのが楽しみ」と言われた。また「外に散歩に出られるのが楽しい」と話していた。他にもいろいろと話してくれた。利用者の「昔ばなし」は面白かった。小さい頃は、トランプやかくれんぼ、鬼ごっこ、おままごとをしたと聞いた。でも、おままごとの内容が現代とは違っていた。私達の小さい頃はおままごとでも、沢山の道具があった。でも利用者のおままごとは何も道具がなく生活の中でのおままごとだった。その他に鬼ごっこやかくれんぼをしたと聞いた。一緒に楽しめた。しかし、利用者の話の中に、「家族」のことを話すことは全くなかった。

「ケアプラン」は、食事が進まない利用者が、進んで食事をするようになることをプランニングして実施した。上手く行かなかった。利用者には「食べる気力」がなかった。利用者はお腹が空いていないとは思えなかった。何故なら、口に運ぶと食べてくれた。「自分で食べてもらう」ことを目的としたが、できなかった。食事介助は楽しくなかった。上手く行かなかった原因について考えてみた。その利用者とは、あまりコミュニケーションをとっていなかった。利用者が部屋に入ってしまうと、自分が部屋まで行ってまで話すことはしなかった。コミュニケーションをとって信頼関係を築くとか、楽しむためのコミュニケーションをしなかった。ケアプランの実施が上手く行かなかった理由はこの点にあった。「食事の改善をすること」だけに捕らわれ、大切なコミュニケーションを通しての人間関係ができていなかったことに気づいた。

第1段階実習、第2段階実習ともに、コミュニケーションによる心の触れ合いがないとつまらないと感じた。人間関係が上手くいっていないと介護をすることにも支障が出て何事も進まないし、上手くいかないことに気づいた。次の段階の実習では、「コミュニケーション」を大切にして「信頼関係」を築き、利用者と楽しむことができる関係を作る目標を掲げることができた。

③学生C

第1段階実習は12日間が長く感じた。何をやって良いのかわからなかった。「排泄介助」を実施した際、麻痺がある人はこんなにも動かないんだということを知った。「また、正直、「臭い」「汚い」「ヤダ」「自分はどうして介護の学校に入っちゃったんだろう」と思った。

第2段階実習は違った。第1段階実習のときに感じたものが違っていた。第1段階実習の

「何をして良いのかわからない」という感じはなく、状況を見ようとしていた。職員の動きを見ながら、今自分がどう動けば良いのか考え体が動いた。23日間も、はじめは緊張感もあって長く感じたが、途中からは「もうすぐ終わってしまうんだ」とさえ思った。

第1段階実習で感じた「排泄介助」での「何で介護の学校に入っちゃったんだろう」という気持ちは第2段階実習では消えていた。このような感じ方の変化は、一つには、「第1段階実習で経験した」という体験的学習があったからだと思う。もう一つは、自立しておられた人が多かったため、しっかりコミュニケーションが取れていたことが大きかったと思う。おむつ交換も行ったが、「ヤダ」という感情がなかった。それは、ケアプラン作成の対象者になってもらった人だったので、「人としてきちんと対応できたから」だと思う。

時間が過ぎ実習に慣れてくると、そして職員が利用者に使っている慣れた口調を耳にし、つい自分も職員のように慣れた気になってしまった。「タメ口」になってしまった。指導者から注意を受けた。敬体である「です」「ます」調を使うことが必要であると感じた。

第3段階実習は、「グループホーム」の体験をした。介助はゆっくり、その人その人にあった対応をしていた。比較していうことができるなら、施設は「流れ作業」をしていると感じた。自分は「利用者にじっくりと対することができる、しっかり向き合える介護福祉士になりたい」と思った。

今回、私はこれら三つの実習について、「利用者にじっくりと対することができる、しっかり向き合える自分」であったかを内省してみると、利用者に声をかけられても、「ちょっと待っててください」を連発し、しっかり向き合っていなかったことに気づいた。何故なら指導者に確認してから実施しなくてはと思ったからでもある。そして、「ちょっと待ってください」ではなく、「今この仕事を済ませてきますので、待っていただけますか」とか「実習生なので、ちょっと聞いてきます」あるいは「急いでいますか」など、しっかり向き合って聴くべきだったと思う。声は聞いていたが、聴く姿勢はなかったと思う。

第4段階実習では、二つのことを心がけたい。一つは、第4段階実習で三つ目の特別養護老人ホームを経験することになるが、それぞれの特別養護老人ホームの違いを把握したい。もう一つは、自分の言動がこれまでの実習とどう違っているか、つまり、利用者にじっくりと対することができているか、しっかり向き合えることができているかを感じたい。

「物」を見ると嫌になってしまうが、「人」や「人の心のふれあい」、「しっかり向き合うこと」が出来れば、「物」を超越することができることに気づいた。そのことを次の段階の目標として掲げ進もうとする意欲に繋げることができた。

④学生Ｄ

第1段階実習は、認知症の中重度の人々が多い施設で実施した。コミュニケーションをする努力はしたが、話が通じなかった。「異食」する利用者がいた。職員が止めたが「ショック」だった。その施設は、利用者が排泄の際にトイレの椅子にベルトで括り、巡

回して介助をしていた。その異食のある利用者の介助に戻ったとき、利用者がオムツを裂いて食べていた。ショックだった。

人形を自分の娘と思っている利用者がいた。その人形がなくなってしまった。利用者は不穏になった。職員は他の人形を渡した。不穏が消えた。その人形は、「くまのプーさん」だった。「娘さん、黄色くなったみたいですね」と声をかけると、「少し黄色くなったわね」と言っていた。少し可笑しかった。

介護技術は難しかった。「車椅子介助」「トイレ介助」は大変だった。「食事介助」は利用者の口に食べ物を運んだが、その後どうして良いのか分からず難しかった。「着脱介助」は利用者の情報がなく、実習生だけで行うことになりどうして良いのか分からなかった。不安感があり嫌だった。

第2段階実習はびっくりした。コミュニケーションが取れた。話が通じた。嬉しかった。返答が返ってきた。自己紹介の後に、私の名前を覚えてくれた。心が通じた感じがして嬉しかった。認知症の人のフロアーでなかったので、自立した人が多くしっかりしていた。

「介護技術」では「排泄介助」で、便のオムツ交換をした。はじめびっくりしたが、その後は少し慣れた。「トランス」も体験した。はじめは不安であったが、全介助の人のトランスも経験した。「入浴介助」は機械浴を体験した。

「ケアプラン」作成の対象者になってもらった利用者に、パズルをしてもらった。利用者は、「もう嫌だ、こんなもの見たくない」と機嫌が悪くなってしまった。時間をおいて、再び「やりましょう！」と声をかけたら、仕方なくやってくれた。

今から考えると、ケアプランを作成する対象者とコミュニケーションが上手く取れていなかったと思う。つい、コミュニケーションが取りやすい利用者と話していたと思う。ケアプランの対象者ではない他の利用者とのコミュニケーションの時間が「7」の量とすると、対象になってもらった利用者は「3」であった。食堂の席が遠かったため、あまり話せなかった。離れていてももっとコミュニケーションを取り、信頼関係を築けば良かったと思う。そして、もっと対象者のことを理解し興味のあることを実施すれば良かったと思っている。

また、今だったら、第1段階実習で会った認知症の中重度の人々に対しても、もっと違った方法でコミュニケーションを取る努力をすると思う。話が通じないと言わず、通じる努力をすると思う。

第4段階実習では、コミュニケーションを取り、信頼関係を作って、利用者が望んでいることを「ケアプラン」にしたいと思う。もっと「相手を理解しよう」と思う。

「コミュニケーションを取る・取れない」「話が通じた・通じない」ではなく、「相手を理解しよう」とすることが大事であることに気づいた。その方法は言語だけではないことに気づいた。そして、「利用者の意思を尊重する」ことの大切さにも気づいた。「相手を理解し意思を尊重する」という次の目標ができ、大きな気づきを得ることができた。

⑤学生Ｅ

第1段階実習は、何をして良いのか分からなかった。「排泄介助」は、見学だけであったが衝撃的であった。その日の昼食が食べられなかった。嫌だと思った。「食事介助」は、認知症の人の介助をしたが難しかった。「コミュニケーション」はしゃべってくれる利用者と話した。幻覚のある利用者がいて、「犬がいる」と自分の家の犬がいるように感じたらしい。私は「犬がいますねー」と返した。全体としては「楽しかった」と感じた。

第2段階実習では、「排泄介助」は平気だった。便が手についても平気だった。コミュニケーションが取れていて親しくなって信頼関係が出来ていたからだと思う。

「ケアプランを作成したこと」は良かった。目標があってやりやすかった。結果が見えた。折り紙をするプランを立てたところ、ケアマネジャーは「自分だったら、折り紙なんて嫌だなあ。ボールが良いなあ」と言った。そこで、「切り絵」を提案したところ、利用者は喜んでやってくれた。もう一つ「自走の距離を伸ばす」というプランを立てた。利用者の了解の上で行ったつもりであったが、大きな声で怒られた。「医者が付いているんだから」とぶつぶつ怒っていた。一緒にリハビリに行った。次の日はやってくれた。その後、信頼関係ができて、見守りを行うなかで、利用者は食堂からトイレまで自走することができた。もっと早くリハビリに一緒に行けば良かったと思った。

ある利用者がいざっていたので、私は車椅子に移乗したほうが良いと考えたが、職員は「どこまでできるかみている」と言われた。

「入浴介助」は、その人の麻痺の状態が分からなくて難しかった。「トランス」は全介助で振戦がある人で、何回も実施させてもらったが難しかった。「コミュニケーション」はスムーズに取れた。自分が特に考えなくてもスムーズにコミュニケーションが取れた。買い物の日は楽しかった。

第3段階実習の「訪問介護」は楽しかった。家族との関係も大切だと感じた。在宅での利用者は施設の利用者と表情が違っていた。「自分のうちにいる」という安心感があるように感じた。また、自分の家での工夫があった。ペットボトルを生活の中で上手く利用したりしていた。自分は「訪問介護」の仕事がしたいと思った。でも、何かあったら一人での仕事は不安と感じた。

第1段階から第3段階の実習を振り返って、「何かが変わった」と思うことは、自分は「コミュニケーション」の取り方が分からないと思っていたが、多くの利用者と話すことができたことであった。コミュニケーションは大切で、コミュニケーションを取ったせいか、認知症の人が3日間で自分の名前を覚えてくれた。感激した。

第2段階実習で、知らんふりする人、無視する人がいたが、23日間で信頼関係ができたような気がした。相手を理解し信頼関係を築くことの重要性に気づいた。

第4段階実習では、声を大きくするように努めたい。そして、利用者のことを理解するために、書面による情報、対面による情報、その利用者のことを質問したり、コミュニケーションを取ったりしながら深く理解したい。利用者の心に寄り添いたい、そしてその

人に安心してもらいたいと思っている。

⑥学生Ｆ

第1段階実習では、「排泄介助」「入浴介助」は初めてでびっくりした。一番難しかったのは、コミュニケーションだった。認知症の人への声かけも何と声をかけて良いのか分からなかった。泣いている人には、「泣かないでください」「大丈夫です」と言って声をかけた。

第2段階実習では、コミュニケーションが取れた。信頼関係も少しできたと思う。第1段階実習の12日間より多い23日であったため、利用者と共にいる時間が長かったことで、利用者の気持ちが理解できたし、利用者の情報を得ることができた。その情報があったから生活支援の技術がスムーズに行えたと思う。ケアプラン作成の対象者になってもらった人の同室の利用者に怒鳴られた。今から考えると、怒鳴った人は自分がかかわってもらえないことに寂しかったのかもしれないと思った。

第3段階実習では、筋ジストロフィー疾病のある兄弟への「訪問介護サービス」に同行した。兄は、自分と同じ年の20歳であった。弟も同病で別のヘルパーが同時間帯に入っていた。その人がどんな気持ちだったのか分からないが、自分は悲しい気持ちになった。体が不自由な人、施設にいる人、みんな悲しみを持っているのだと思った。自分が一緒にいることで少しでも「安心感」を感じてもらえたらと思う。それには、利用者のことを深く知ることが必要だと思った。

第1段階から第3段階実習を通して感じたことは、「初心忘るべからず」であった。「相手を思いやり」「理解し」「信頼関係を築く」こと、また、まわりの状況判断ができる力を養うことの必要性と感じた。第4段階実習では、これらのことをしっかり心に止めて実施したい。

⑦学生Ｇ

第1段階実習では、介護技術は見学であった。利用者とのコミュニケーションが中心であった。コミュニケーションは難しく、自分としてはきつかった。指導者は、細かいところまで指導してくれた。そのことも自分にはきつかった。

第2段階実習はやりやすかった。例えば、担当フロアーの利用者が声をかけてくれることが多かった。自分から声をかけるのが苦手なので助かった。「お姉さん、お願い」とか「落ち着いてやってね」とか言われた。指導者からも、「思うように、自由にやってみて」と言われた。技術では、「排泄介助」は、オムツの位置が合わなくて難しかった。「食事介助」では、声をかけるように指導を受けた。職員の中に一人、キツイ言い人をする人がいた。私は1回泣いてしまった。具合が悪くなり病院へ行ったため、遅刻を2回した。

今回、先生への報告に、自分からの報告と指導者からの報告に相違があった。指導者からの報告が正しかった。私は、自分を守るために、自分を正当化するために、嘘を言って

しまった。以前から私は、「自分は悪くない」「自分を守るための言い訳をする」「嘘をつく」といった傾向があった。今でもつい言い訳を言ってしまったり、嘘をついてしまったりしてしまう。しかし、言い訳をしたり、嘘をついたりすることを繰り返すことは良いことではないことを痛感した。結局は自分の信用を失ってしまうことに気がついた。これまでもわかっていたが、何とかなるといった甘えがあった。

自分の習性はなかなか直らないが、第4段階実習では、自分がしたことの「言い訳」や「嘘をつくこと」は止めようと思った。

⑧学生Ｈ

第1段階実習の施設は、「自分には合わない」気がした。施設が広く、古く、暗かった。利用者は、いろいろな人がいた。職員はみな良い人だった。「介助」はいろいろさせてもらった。「コミュニケーション」は長く感じた。大変だあ、やっていけるかなあと思った。12日間は何とか過ごせた。

第2段階実習の施設は、明るく綺麗だった。感激した。職員がバリバリ働いていた。「です・ます」調で話し、自分と空気が合うと感じた。

一番嬉しかったことは、ケアプランを立て実施し良い結果を出せたことだった。「ベッド上で仰臥位から端座位が全介助で行われていたが、実習が終了する頃に「一部介助」になった。利用者との会話の中に、利用者の「願い」「やる気」を感じた。「前のように動きたい」「以前は自転車に乗っていた」「前は歩いていた」と言っていた。その思いを受け止め、共感し、ケアプランの「目標」とし「形」になった。本当に嬉しかった。その利用者とはコミュニケーションをよく取った。指導してもらった職員との連携も良かった。職員が日々の仕事の中で、利用者からの私への訴えに対応してくれていた。枕の位置を変える支援計画を実施したところ、夜間に利用者から「眠れない」との訴えがあった。そのことに対して、職員が方向を変え元の位置に戻してくれていた。良かったと思った。利用者の気持ちを察しほっとした。利用者の「前のように動きたい」思いを受け止めて、「全く一人ではできないこと」を「自分で少しできるようになった」が実現した。嬉しかった。今思うと、利用者の「歩きたい」という意思もケアプランに反映すれば良かったと思う。その時、「利用者の気持ちを受け止め、目標を持って進めば不可能なことはない」と強く思った。

第3段階実習で、「デイサービス」の送迎を経験した。そこには、「家族との触れあい」があった。「訪問介護」では、日中は家族が留守で一人でいる人も、全く一人で暮らす人も、「自分の居場所」があった。物があふれ、地震がきたら押しつぶされそうな家に住んでいる人も幸せそうであった。

振り返ると、今であれば、第1段階実習での利用者と、ノンバーバルな話し方をもって利用者を理解しようとすることができる気がする。

今回感じることは、そして実習中に感じていたことであるが、「目標をもって進むこ

との大切さ」である。利用者が、そして介護者が一緒の目標をもって進むことによって、「到達点に近づくことができる」と思った。もう一つは「利用者との接し方の大切さ」である。その人がぐったりしたら、ぐったりする気持ちを理解しようとする。「その人の気持ちに近づく」、「その人に寄り添う」ことが大切であると思った。

第4段階実習は、障害者施設で実施する予定である。どのような人々に接するか分からないが、口が利けなくても、同じ気持ちにはなれなくても、「寄り添う」ことはできるかもしれない。「利用者の気持ちを大事にする介護福祉士になりたい」「不安や孤独」に寄り添いながら、利用者の理解を深めたいと思っている。

⑨学生Ｉ

第1段階実習は、施設が汚かった。尿臭や便臭がした。自分はやっていけるかなあと思った。実習に行く前から、噂は聞いていた。実習が始まってから何日目かに「オムツ交換」をした。汚い、臭いなど抵抗感があった。焦った。早くしなくてはと焦り、手順が目茶苦茶になってしまった。でもその後は少し慣れた。「入浴介助」は見学した。オムツを外したら、突然便がでてしまった。ドロドロ便だった。浴室だったので、すぐに洗い流した。大変な仕事だなあと思った。その時は、嫌だとは思わなかった。「トランス」を学んでなかったが、「やってみる？」と指導者から言われ、「はい」と言ってしまった。立位の取れない人だったので、上手くいかなかった。お互いに怪我はなかったが、怖い思いをした。

大変だったのは、コミュニケーションだった。聞くだけだった。どのように声をかけて良いのか分からなかった。認知症の人で何度も同じ話をしていた。「どこからきたの？」と何度も聞かれた。あまり会話にならなかった。指導者からは、「コミュニケーション取ってて」と言われ、苦痛だった。1日が長く感じた。「早く終わって欲しい」と思った。「巡回の先生に来て欲しい」と思った。6～7日目くらいは、本当に「行きたくない」と思った。介護の世界は甘くないと感じた。そのうち、職員の対応を見ていて、職員のように「そうですね～」と軽く言えばいいんだと思った。私も流した。

また、「ショートステイ」の利用者の送迎を体験した。指導者には、いろいろな人がいた。苦手な指導者がいた。その人は、指示が細かかった。靴下の履かせ方を細かく言ってきた。そこまで細かく言わなくても良いのにと思った。自分は指示されるのが嫌いだった。かといって、大ざっぱな指導も嫌だった。

第2段階実習は楽しかった。第1段階実習では大変だったコミュニケーション、聞いてばかりだったコミュニケーションが、第2段階実習では情報を収集する必要があったので、利用者に自分から声をかけることができた。

「陰洗」をするとき、「熱い」と怒られた。何回かするうちに、湯温の確認をするようになったので、その利用者から「ありがとう」と言われた。嬉しかった。また、利用者は職員には穏やかであった。職員と利用者の「絆」を感じた。

ある女性の利用者から、「馬鹿」と言って叩かれた。ショックだった。その利用者は、気分にムラがあった。機嫌が悪いときは、離れているようにした。その利用者はギスギスしていた。平穏ではなかった。お茶が出ると、「不味い」と言った。美味しいものが口に入ると「平穏」だった。職員の誰もが、その人に向き合っていなかった。自分は上にいるようにした。上から目線で話した。「私、馬鹿じゃないですよ」「フン」と流した。楽だった。自分の「平穏」を取り戻すようにした。

第2段階実習の23日間は長かった。でも感動があった。その感動は仲間に支えられたということだった。仲間6人がバラバラではなかった。一人が何かを言うと、皆がその一人の話を聴いた。本当に良い仲間に出会ったと思った。仲間が作りだす雰囲気は「平穏」だった。居心地が良かった、お互いが尊敬しあっていた。お互いにしっかり向き合っていた。

今振り返りを行い、自分は、仲間を信頼し、しっかり向き合って話を聴き、敬意をもっていたのに、利用者には、信頼もなく、しっかり向き合ってもなく、敬意どころか上から目線で流していたことに気づいた。びっくりした。

第1段階実習も、第2段階実習も、人の話を、声かけを、人の心を流していた。実習中は、そんな自分に全く気づかなかった。第3段階実習の知的障害施設での実習では、同じ目線で話が出来た。平穏を感じた。居心地が良かった。それはきっと、以前ボランティアで知的障害の施設での経験があったせいもあるが、素直な気持ちで接することができていたからだと思う。今は大きな気づきを得た。人に対するときは、「流さず」、「敬意」をもって「傾聴」し、「受容」し、「受け止める」ようにしたい。そこから「平穏」を作り出したい。

第4段階実習では、「人としっかり向き合うこと」を目標にしたい。

⑩学生Ｊ

第1段階実習は介護老人保健施設であった。広くて綺麗だった。理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ケアマネジャーなどさまざまな職種の人たちと接することができた。「介護技術」では、見学が多かった。利用者の多くは自立度が高く、コミュニケーションも取れた。体操をしたりリクリエーションをしたり楽しかった。

第2段階実習は特別養護老人ホームでの実施であった。古い施設であった。はじめ、施設内の雑用の仕事が続いた。つまらなかった。アルバイトのようだと感じた。それからは「やらせてもらおう」「積極的に動こう」と思い、指導職員にお願いした。

勿論、施設内の雑用の仕事もした。身体介護を進んでやった。トランスもやらせてもらった。楽しくなった。「人とのかかわり」があった。「やりがい」を感じた。私的なことでも忙しい状況にあったため、毎日が眠かった。休憩時間に座っているとあっという間に寝てしまった。先生の指導もあり、朝、施設がある駅につくと、「今日は何をやる」という目標を設定することにした。切り替えることをした。不思議と眠くならなかった。

「介護技術」は、第1段階実習で見学していたが、やり方が施設によって違うため、全く

ゼロからのスタートと感じた。それでも、積極的に動いたので、かなり介護技術はできるようになった。3日で40人の利用者の名前を覚えた。そのように施設から指導されたので、大変だったが覚えた。そして、行動を取る時は必ず利用者の名前を呼んでから行動した。

第2段階実習は、第1段階実習と違って、認知症の利用者が多かった。自分は、「認知症」の人への対応を経験したことがなかったので、どうかかわってよいのか分からず正直なところ怖かった。しかし、会話の中に入ってみると、自分の家のおじいちゃんやおばあちゃんと少しも変わらなかった。そして、人生の先輩であることも変わりはなかった。一緒にエプロンを畳んだりした。叩かれたり抓られたりしたが何ともなかった。学校で学んだように、言葉は短く、一つひとつ分かり易い話し方をするよう気をつけた。「ごっくん」とか「ぶくぶく」とか職員の口調を真似た。また、職員が陰で利用者のことをいろいろと悪口を言っているのが気になった。

第3段階実習では、「訪問介護サービス」を体験した。訪問介護は、一人の利用者との関わりが深いので面白いと思ったが、自分は施設の方が合っているとも感じた。「グループホーム」の体験での「作業所」はびっくりした。自閉症の若い利用者もいた。「認知症グループホーム」は8～9人くらいの利用者を2～3人の介護職が対応していた。時間がゆっくり流れていた。

自分は、高校時代に部活で扱かれ大変な思いをしてきた。部活では、「挨拶」「礼儀」「辛抱」「連携」などこと細かく注意された。実習施設である社会も、求められるものは一緒だと思った。また、部活と同じように、一人ひとりではできないことも、みんなの力で協力すれば、「大きな力になる」と思った。

今までの実習を通して学んだことは、「人とのふれあい」がないと楽しくないこと、目標をもって実施することで「切り替え」ができること、どんな立場であっても、周りの人たちの状況、つまり「場」をみる力を身につけることが大切だと気づいた。これらのことを次の目標としたい。

9．考察

本研究では、「人としての成長」を「気づくこと」とし、その「気づくこと」を、「気づくことが自分自身の感受性を高めた」「気づくことが自分自身の介護職としてのアイデンティティを確立した」「気づくことが他の成長を可能する基盤を作った」と三つの質的差異に分けて検証することにした。また、介護福祉士として求められる「受容力」「共感力」「傾聴力」「忍耐力」「想像力」などさまざまな力量のどのような点に気づき、その改善が見られたかについても検証することとした。

本研究で、10名の学生のうち6名が、「気づくことで、介護福祉士としての自分自身のアイデンティティを確立する」ことができた。それは、介護福祉士に必要なことは介護技術は勿論であるが、「利用者を理解すること」「利用者に寄り添うこと」「利用者の意思を尊重すること」「利用者としっかり向き合うこと」「人間関係を構築すること」「具体的な目標をしっ

かり持つこと」「不可能な目標なんてないこと」、つまり「受容力」「共感力」「傾聴力」「人間関係構築力」「目標設定力」の重要性に気づいたのである。また、2名は、「気づくことで、感受性を高める」ことができた。それは、「利用者の状況や変化を把握しようとすること」「利用者の苦しみや悲しみを感じようとすること」、つまり「観察力」「感受性」の大切さに気づいたのである。残る2名は、彼らは自分自身の特性が「自分を正当化するために、いつも言い訳をしたり嘘をついたりしていること」「自分が何事にも流してしまい、向き合おうとしないこと」、つまり介護福祉士として必要とされる「自己の特性」に気づいたのである。

彼らのうちの2名は、目標設定を行い実施していたが、その重要性に気づいたのは、ポートフォリオによる振り返りの結果であった。他の8名については、気づくことで新たな指針を掴むことはでき、改善策を講じることができたといえる。

「気づくこと」とは、文字通りの意味で「気づく」ではない。すなわち、他者の体験や観察から理解したのでなく、自らの体験を通して、自らの感性や知性の変化のなかで理解し気づいたのである。換言すれば、実習体験からの気づきは、自らを安全な場所において観察した気づきではなく、感性や知性を不安定な場所・状態においた上で再構築したなかで獲得したものなのである。

また、10名の学生のうち、9名は今回の振り返りを行うまで自己の変化や成長に気づいていなかった。また、1名は実習中曖昧には気づいていたが、今回、その気づきを自分の中で言語化して確認することができた。今回ポートフォリオを用いて実施した成果は大きく、学生はそれまでに認識できていなかった自分の考えや行動の変化に「気づくこと」ができた。学生は、実習現場で起こるさまざまな場面で、大なり小なり自分の言動の変化を体験していた。それは無意識に行った行動であった。そのため、今回、それぞれ自分の行動を振り返り、立ち止まり、変化に気づくことができたことは、学生らにとって大変有意義であったと考察される。

10. 今後の課題

今後の課題として次の三点をあげたい。第一点は、本研究は、教員が担当した学生10名に対して行った調査結果での報告であるが、信頼性や妥当性は証明されない。信頼性や妥当性を得るためには、全員に調査を実施する必要がある。

第二点は、学生の「人としての成長」を別の尺度からの検証する必要がある。本研究では、「人としての成長」を「気づくこと」とし、その「気づくこと」を、「気づくことが自分自身の感受性を高めた」「気づくことが自分自身の介護職としてのアイデンティティを確立した」「気づくことが他の成長を可能する基盤を作った」と三つの質的差異に分けて検証したが、全く別の尺度で検証する必要がある。初井（2002）は、「Wordsworth と放浪の人々」の中で、詩人Wordsworthが、放浪の人々を上から下への‘pity（哀れ・気の毒）’の感情をもっていたが、Wordsworthは、長い人生の道のりで、‘pity’ではなく、下から上への‘admiration（敬意・憧れ）’の感情が生まれ、その感情の変化の過程こそが「詩人の成長」

として分析している。学生は詩人ではないが、このような下から上への‘admiration’の感情を「人としての成長」と捉え検証した場合、また違った結果が出たと考えられる。

第三点は、学生が自分で考え、自分で気づくことができるワークシートを作成する必要がある。本研究では、ポートフォリオを活用して聞き取りで実施したため、教員がスーパーバイザーとしての役目を担った。教員は傾聴するだけでなく、学生が「振り返り」を行う過程で、学生自身の言葉をそのまま学生に返し「気づきを得る」ように促した。また、学生が気づいた「テーマ」を学生が次の実習に繋げていくことができるよう示唆した。今後は、教員が示唆するのではなく、学生が自分で考え、自分で気づくことができるワークシートを作成する必要があると考える。

11. おわりに

本研究の調査を始めるにあたって、学生に対して、本研究の結果を研修会や学会等で発表をすること、また発表する際には、個人が特定されることはないことを説明し同意を得て実施した。しかし、聞き取り調査が終了すると、学生から「個人が特定されても構わない」という言葉が返ってきた。

学生のその言葉は、学生が自分の実習を振り返り、「自分の成長を確認した達成感や喜び」、「教員が自分の成長を認め、次へのステップを後押ししてくれた嬉しさ」からくるものと推察された。

本研究に協力してくれた学生一人ひとりが、今回認識できた自分の「気づき」を介護現場で生かし、それが養成校を卒業後も追い続けるテーマとなることを望んで止まない。そして時々、自分の振り返りを行い、「気づきの習慣」を身につけ、常に真摯に学ぶ姿勢を育んで行くことを期待したい。

参考文献

1. 飯田紀彦・原田祐貨・苫米地憲昭「座談会：大学生のメンタルサポート」大学時報 2010
2. 岡田　綾「看護研究・実践成果報告の取り組みに期待すること」Nursing Today2009・9
3. 厚生労働省 「社会福祉士および介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」2008
4. 鈴木敏恵『ポートフォリオ評価とコーチンング手法』医学書院 2008
5. 鈴木敏恵『看護師の実践力と問題解決力を実現する！ポートフォリオとプロジェクト学習』医学書院281 2010
6. 高浦勝義「ルーブリック導入の意義と課題」－学習者中心の教育評価へ－『看護教育』51　2010
7. 野中郁次郎「直接経験の場をつくることがイノベーションにつながる気づきを生む」『人材教育』5 2010
8. 初井貞子「Wordsworth と放浪の人々―An Evening Walk から‘Gipciees’に至る詩人の成長を追って」帝京大学福岡短期大学紀要（14）2002
9. 平木典子「カウンセリングと生涯教育―個人の成長を自分自身で促進できるように援助する―」『社会教育』1993-10

10. 山下恵子・尾台安子「介護福祉実習に対する実習施設側の意識と課題」松本短期大学研究紀要（14）2005
11. 綿　祐二他「介護実習教育の国際生活機能分類（ICF）に基づいたアセスメントシートの開発とポートフォリオ評価の試行」文京学院大学総合研究所紀要 9　2008

Summary

What Students Learned through Practical Training at Training Institutions for Care Workers
— Use of Portfolios —

Yasuko Hirasawa

A practical training program in care workers training course is a very important program in which trainees could experience a real work and integrate it into their technical knowledge and skills learned on campus. Students are said to grow through practical training. They not only acquire skills but also think of "meaning of respecting the dignity of others" and build "view of the care." This research examined whether students were aware of their own growth, what they noticed through the training, and how it had affected them. Most of them were not aware that they had grown. As we review the practical training using portfolios, they realized where they stood on their growth map, and built a new goal. This result suggested that the realization of own growth which was led by noticing change in own mind and action was very important because it led to a new goal.

Keywords　Practical Training for Care Workers, Growth as a Human Being, Realization, Portfolio

（2012年5月24日受領）